
手紙の行方

メロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手紙の行方

【Nコード】

N7136S

【作者名】

メロ

【あらすじ】

ななこちゃんが、夏休みにおばあちゃんのところ遊びに行くために手紙を書きました。手紙はどうやっておばあちゃんの元にたどりつくのでしょうか？ななこちゃんは、手紙がどうやっておばあちゃんのところにとどりつくかを調べることにしました。

おばあちゃんへ

「おばあちゃん元気ですか？夏休みになったら遊びにいきます」

ななこちゃんは遠くの町に住んでいるおばちゃんに手紙を書きました。

電話でもいいのですが、おばあちゃんは電話とか文明の機器には疎いのです。

連絡もなしに、行くとおばあちゃんがびっくりしてどうにかならないようにと言う、ななこちゃんの配慮ですね。

「ポストに入れた手紙は、どうやっておばちゃんところに届くのかしら？」

ななこちゃんはそう思いました。

そこでななこちゃんは、どうやっておばちゃんところに手紙が届くのか調べてみることにしました。

ななこちゃんは近くにある、魚屋さんに手紙をもっていきました。

手紙と言えば魚屋さんです。

手紙魚は形が似ている。

魚屋さんにつくと、魚屋さんのおやじにいろいろ聞きました。

「ポストに入れた手紙はどうやっておばちゃんところに届くのか？」

魚屋さんは少し戸惑いながらも答えてくれた。

「俺は魚屋だから詳しくはわからないけど、郵便局の人がポストから集めて、届けてくれるんじゃないか」

手紙を届けるのは郵便局の人らしい。

魚屋さんは郵便局ではない。

「じゃあ、魚の口到手紙を入れたらどうなるの？」

魚の口は、ポストと同じ効果を期待してしまう。

口を開けて、手紙をくるのを今か今かとまっている。

「魚の口到手紙！？魚の口到手紙を入れても何も起きないよ。何か起きるとしたら魚屋さんに怒られることくらいだよ」

魚の口はポストとはシステムが違うらしい。

手紙を口に入れても、郵便局は回収にこないのだ。

これは郵便局の怠慢であり、サービス不足だと言われもしかたない。

「魚屋さんが怒るの？だったら私はそれ以上に怒るよ！」

魚屋さんの逆ギレには、ななこちゃんも怒って対処させてもらう。

魚の口に手紙を入れて、当事者でない魚屋さんに怒られるなんて理不尽極まりない。

ここは法治国家、法にのっとり肅々とやらせてもらう。

「なんで！？魚は商品なんだから、いたずらされたら魚屋さん怒るよ」

魚を商品としか見ていないタイプの魚屋さん。

「じゃあ、魚よりポストの方が偉いんだ」

魚は手紙を届けられないが、ポストは手紙を届けられる。

これにより、優劣関係ははつきりと浮かび上がった。

「偉いとかそういう問題じゃないと思うけどな」

奇麗事では手紙は届かない。

客観的事実をもって、上下関係を決める。

「魚はポストにいつも、ガムを買わせに行かされているのね」

手下はガムを買いに行かされるディスティニー。

これは長い人間の歴史を振り返ってみても、至極当然のように繰り返されてきている。

「なんで郵便局の車って赤いの？ラッキーカラーなの？」

郵便局の車の色は赤い、不自然なほどに。

疑問を持たない方がおかしいほどに赤いのだ。

赤い車はあるが、あれほどの赤さはない。

そしてそれは郵便局の移動手段すべてに言える。

つまり意図的に赤くしていることなのだろう。

「それは郵便局の人に聞いてみないとわからないよ。ラッキーカラーとかそう言う理由ではないと思うけど」

理由は魚屋さんにはわからない。

調べるつもりもない、なぜならそれにより困ったことがないからだ。
「あの赤さは鯛の皮の部分だけを使った贅沢な車なの？」

郵便局の車の表面をよく見ると、鯛の皮の部分だけを使っているかもしれない。

近距離でまじまじ見たことがないのでわからないが、あの赤さならあながちありえない話ではないのかも知れない。

「車の表面に鯛の皮使う必要ないだろ！臭いだろっし！」

魚屋さんが言うなら間違いないだろうし、車の表面に魚の皮を使うと強度上で問題があることが容易に想像できる。

そして、臭い。

「カサゴは？」

カサゴは背びれに毒がある。

今、この説明は必要ないけどね。

「種類とかじゃなくて、魚は車の表面に使わない！」

魚は車の表面には向かない素材である。

一般的に考えてもそうだろう。

「イチゴは？」

赤ければなんでもいい。

イチゴが車の方面に使われていたら、甘い香りで郵便局の車は人気になるだろう。

だが、蟻に群がられいずれ黒い車になる。

「使わないよ！」

イチゴは車に向かない。

理由は魚の皮と同じ。

気持ち

「ポストを開けると袋があるけど、アレには何が入っているの？スパゲッティ？」

ポストの中には謎のこぶくろがある。

茹でたてのスパゲッティを袋に詰めて、ポストで保管をする。

郵便局の想像を超えたサービス感覚。

本場イタリアでもお目にかかることはない。

「スパゲッティは入ってないよ！なんでそういう発想が出てくるの？ポストに入れる物と言った手紙だろ」

ポストに入れた、手紙が保存される為だけの袋。

他に利用価値はみつからない。

「生物は？」

ポストに入れるものは、手紙だけとは限らないのではないか？

あの小さい入り口から、いろいろな物を中に押し込む。

私たちには押し込むだけの力がある。

「ダメだよ！生物いれちゃ！手紙以外の物はいれちゃダメだろ、常識だぞ」

常識であり、ルールでもある。

そこには罰則もある。

犯罪行為なのである。

「自分では常識だと思っていることが、世間では常識でないことが案外多い」

常識に縛られてしまうことで、考える力を窒息させてしまうことはならないのだろうか？

常識を外れたところに、閃きはある。

ななこちゃんの子供の教育方法に疑問を持っている。

教育のあり方と将来の国のビジョンを離して考えることはできない、この国はどういう国を目指すのか？

国のビジョンをはっきりさせることで、この国の教育の方法も変わるのではないだろうか。

「それはそうかも知れないけれど、ポストに生物いれちゃいけないよ」

しかしルールはルール。

ルールを守れない者は、ルールに文句を言う権利させない。

「常識どおり魚屋だから魚しか置いてないってわけね」

魚屋さんだからって魚だけ置いておく必要などない。

ただし、あまりにも無造作に商品を陳列することは商売としては正しい行為とは言えないだろう。

魚屋さんにくる人は、魚を買いに来ているわけだ。

したがってより多く、より新鮮な魚をそろえることが魚屋さんとしては正解。

「魚屋なんだからいいだろうそれで！」

「郵便局に集められた、郵便物はどうなるの？」

郵便物は郵便局に集められ、どうなるのだろうか？

そこでの情報が開示されていない。

「大きさとか形とかで、わけられるんじゃないかな」

あくまでも想像だが形、配達先で仕分けをされているのだろう。

「目隠して？」

心の目で、手紙の仕分けをする。

目で見える情報に惑わされることなく、自分の気持ちを手紙にダイレクトに反映させる。

手紙に籠められた気持ちと、仕事を早く終わらせたい郵便局員の気持ちが通い合い仕分けされる。

「なんで！？配達先、めちゃくちゃになるだろ」

正しい、配達先に届くことはない。

奇跡を祈って、手紙に文字を書き込め。

「日付スタンプは自分の誕生日を押してくれるサービス」
スタンプは飾りであり何の意味も持たないのだ。

日付なんてただの数字の羅列であり、お遊びだ。

「日付で何時、手紙だしたかわかるようになってるんだよ」

日付スタンプに隠された重要な情報。

「よくテレビとかで見なくてもグラムとか計れる人がいるから、郵便局にも触っただけでどこいきなのか分けられる人がいるの？」

お肉屋さんで見られる光景。

お肉屋さんができるば、郵便局員も当然できなければならない。

「もうそれは超能力者だよ。そんな人いないよ！」

「分けられた手紙はどうなるの？飽きちゃったから捨てちゃうの？」
年賀状で大変な時期によく聞く二ユース。

「捨てないよ！？行き先ごとにわけて配達されるんじゃないか」

「捨てた分は最初からなかったことにして」

「全部配達するから！」

「遠いところにはどうやって運ぶの？」

歩いていけない距離は断念してしまうことがあるのだろうか？

「自動車、鉄道、船、飛行機があるからな。どこだってすぐに配達できるだろ」

郵便局にいけないところはない、宇宙の端だって手紙を届ける。

郵便局には最新の宇宙に関する理論もある。

時間、空間、重力、どれも郵便配達を止める支障になることはない。

「配達する人が帰り道がわからなくならないように、ハガキを捨てながら配達するのね」

どこでも配達することはできるが、帰り道はわからなくなる。

配達には情熱を裂くが、帰ることは興味がない。

帰りたくない。

「しないよ！童話！？」

「あたし、郵便局にいつて詳しいこと聞いてくる！魚屋さんの説明じゃわかんないから」

所詮魚屋さん、郵便局のことなど詳しいはずもない。

聞くだけ無駄だった。

「最初からそうしろよ!!」
「
ななこちゃんはいいで郵便局に走っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7136s/>

手紙の行方

2011年10月4日01時43分発行